

# 御殿堰 大黒天便り



## ◆創刊号◆

はじめまして。  
御殿堰大黒です。



山形市中心市街地を流れる御殿堰。その豊かな水の流れを見守っているのが私「御殿堰大黒天」です。「大黒天便り」では、わたし大黒天が御殿堰の歴史・季節の話題・生活の知恵など『なるほど!』と思っただけの内容をお伝えしていきます。

七日町縁の寺「大竜寺」には、江戸時代の乾漆大黒天が奉られています。明治初期の英国人女性旅行家イザベラ・バードの著書「日本奥地気候」には、日本の商人や農夫がいつも大黒を大事にし、神前には供え物や香が絶えない様子が描かれています。彼女が山形を訪れた際にも、この大黒様を拝んだのでしょうか。七日町に非常に馴染み深い大竜寺の「大黒様」をモチーフに世界的な工業デザイナー奥山清行氏がデザインをし、水の町屋御殿堰にお奉りすることに致しました。

御殿堰にお奉りされる「御殿堰大黒天」は、非常に柔らかく穏やかな表情となっています。大黒天は七福神の一柱として知られ、食物・財福を司る神とされています。

「御殿堰大黒」は、山形市の伝統工芸である「山形鋳物」で造られています。御殿堰へお越しの際はわたしを見つけてみてくださいね。

## 花笠まつり

毎年8月5日〜7日には、山形市の旧奥羽街道にて「花笠まつり」のパレードが行われます。花笠まつりは東北4大祭の一つとして数えられ、県内外からの見物のお客様が訪れます。今月は、皆さまが御存じの花笠まつりについて、少し掘り下げてお話しさせていただきます。

## 花笠音頭とは?

起源は諸説あるようですが、大正中期に尾花沢徳良湖で土木作業時の調子あわせに歌われた土突き歌が起源と言われています。昭和初期に民謡化されて「花笠音頭」となったのだとか。1963年、パレード用に振付をして蔵王夏祭りとして「花笠まつり」が始められたそうです。踊る時には、菅で編んだ笠に赤く染めた紙で花飾りつけたものを景気づけに振ったり回したりしたのが発祥といわれています。

## 花笠の「赤い花」は?

花笠についている赤い花の正体は何でしょうか?この花は山形県の県花でもある「紅花」なのだそうです。紅花はこんなに大きな花ではありません。ではなぜあんなに大きくなつたのでしょうか?実は、最初はそれこそ実物大の紅花で飾ろうとしたのだそうですが、インパクトに欠けたため、遠目からみても目立つようにあれだけ大きくデフォルメされたのだとか。お祭りに使われるのも、お祭りにあつた華やかさが求められたのです。



## 花笠踊り 振り付けの現す意味は?

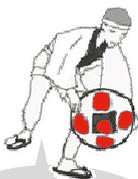
～みなさんはいくつ知っていましたか?～

【笠を両肩に担ぐ】土を運ぶモッコを担ぐ動作や土搗きの紐を引く動作を現します。

【左右に大きく笠を振る】相手をいたわり扇いで風を送る動作を現します。

【笠を大きく頭の上で回す】日差しや雨を除ける動きを現します。

【足元で笠を回す】土を掘り起こして掃う動作やわらじの土を落とす動作を現します。



## 手ぬぐい ～御殿堰～

手ぬぐいを5つのバリエーションでつくりました。それぞれの模様は、この「水の町屋御殿堰」の「どこかにあるもの」をモチーフにしています。是非お手にとつてご覧ください。



オリジナル

御殿堰内「結城屋」にて販売しています

## 山形五堰とは?

水の町屋を流れる御殿堰とは、皆様も御存じの通り山形五堰の一つ。こちらのコーナーでは「御殿堰」についての四方山話をさせていたただきたいと思えます。

山形五堰とは、「笹堰(ささげき)」「御殿堰(ごてんげき)」「八ヶ郷堰(はつかこうげき)」「宮町堰(みやまちげき)」「双月堰(そうつきげき)」の五つの水路の総称です。市街地を網の目のように流れる堰は全国的に珍しく、山形市の歴史的財産であり、景観の特徴となっています。その歴史は、寛永元年(1624年)第十四代山形城主鳥居忠政公が大雨のたびに洪水をおこす馬見ヶ崎川の流路を変更する工事を行い、この工事にあわせて山形城濠への水の供給と生活用水の確保や農業用水不足で悩む農民のため馬見ヶ崎川に五つの取水口(堰)を設け、そこから水を引き用水路(五堰)がつくられました。昭和初期頃までは農業用水としてはもちろん、生活用水・水車を利用した製粉業・精米業や養鯉・染物・鰻問屋などさまざまな産業に活用されていたそうです。近年は、農業用水の他に防火用水機能や親水空間として活用され、五堰上流部では、きれいな水にしか生えないといわれている梅花藻の繁殖やオニヤンマの幼虫・螢などを見かけることもあるそうです。やさしい景観を生みだし、生活に潤いと安らぎをもたらす昔ながらの石積水路は、後世へと残したい貴重な歴史の遺産です。

次号の発行は9月7日です。来月も皆様と紙面でお会いできる